

大正期における京都日本画の女性表現－官能美とリアリズム－

田中 圭子

本論は、大正期の京都を中心に流行した官能的な女性像の展開について論じる。京都の美人画というと、上村松園に代表される貞潔で清廉な女性像が広く知られている。しかし、近年の国画創作協会を中心とする近代京都画壇の芸術運動の検証により、東京・大阪とは異なる、耽美的傾向や社会主義リアリズムを特徴とする女性像が京都において独自の発展を遂げていたことが明らかになってきた。これらの女性像を描いた画家たちの多くは、従来の画塾での教育ではなく、近代的美術教育のなかで育った「学校派」と呼ばれる青年画家であった。彼らの活動に注目し、京都の美術教育の近代化が、画家の制作にどのような影響を及ぼしたのかを考察することで、上村松園に代表される理想化された女性観とは異なる表現が生まれてきた理由を探る。

本論は二部構成になっている。第一部では、リアリズムの獲得による女性表現の近代化が目指された時代を捉え、明治40年代における京都画壇の近代化と、女性表現におけるリアリズムの問題について文部省美術展覧会に出品された作品を中心に考察を行う。特に、当時京都画壇で活躍した理論家が画家の啓蒙に果たした役割に注目し、美術教育の近代化のなかで、画家と理論家の交流が、画家の西欧芸術思潮に対する目を開かせ、個性の尊重や創作の自由に対する自覚を促すとともに、大正期に勃興する芸術運動に影響を与えていたことを論じる。

第二部では、しばしば異端とも称される学校派の新傾向の美人画について、岡本神草とその周辺画家をとりあげ、研究団体・密栗会の活動と国画創作協会に出品された作品の分析を行う。そして、東西芸術の融合を目指す機運の中で、西欧絵画に憧れを抱きながらも伝統的な東洋絵画や浮世絵の研究に立脚することで、単なる表層的写実を越えた女性像の獲得を志向した画家たちの取り組みを明らかにする。

以上の考察から、西欧の芸術概念の流入を受けて近代化された美術教育と、個性を尊重する大正期の自由な時代の雰囲気裏打ちされ、画家たちがそれまでの因習に従った没個性的表現から脱し、独自の女性像を求めるようになっていく過程を明らかにした。草創期には多くの画家たちが西欧絵画の持つリアリズムに刺激を受け、それを女性表現に取り入れることで浮世絵の類型表現から脱し、より存在感のある女性像を生み出そうとしていた。しかし近代的美術教育を受けた学校派の画家たちは、単なる写実表現に留まるのではなく、日本の伝統絵画が持っていた装飾性や簡略化された表現をいかし、写実を超えたところにある神秘性や女性の内面までも描き出そうとする方向へと向かっていった。岡本神草らが制作した、官能美を全面に打ち出し頹廢的とも称された女性像は、西洋絵画の摂取により日本画の近代化を目指した大正期の日本画革新運動の結実点のひとつであったといえよう。